

序 文

本稿は、友人との対話をきっかけに生まれた。発端は、ゴドウィン氏が『エンクワイアラー』に寄せた「貪欲と浪費」であり、やがて議論は、将来の社会をいかに改善し得るかという一般的な問題へと広がった。筆者は当初、口頭よりも明確に考えを示すため、友人に宛てて要点だけを書き留めるつもりでいたが、検討を進めるうちに既存の文献には見当たらないと感じる着想がいくつか生まれた。これらが一般の関心事であるなら、ささやかな示唆であっても公正に受け止められると考え、所見を公表に堪える形にまとめることにした。

本稿は、総論・一般論を裏づける事実や実例をもっと幅広く集められたなら、さらに網羅的で充実したものになっただろう。しかし、きわめて個別的な案件や業務のために長期間ほぼ全面的に作業が中断したうえ、当初の刊行計画からの大幅な遅延は避けたいと判断したこともあり、本件に専念して十分な労力を注ぐことはできなかった。それでも、ここに示した事実や実例は、人類の将来の改善や進歩に関する自説の正当性を支え

る、看過しがたい有力な証拠だと確信している。現時点では、社会を大づかみに捉え、要点を平明に率直に述べるだけで、この見解を確立し支えるにはおおむね足りるだろう。

多くの論者が指摘してきたように、人口規模はつねに生存手段の水準に見合うところまで抑えられる。しかし、著者の知る限り、その均衡がどのような仕組みや制度、作用によって成り立ち、どう維持されるのかを具体的に検討した論は見当たらない。しかも、その実相こそが、将来の社会の大幅な改良に向けた歩みを妨げる最大の障害だと著者は考える。著者は、この興味深い主題を論じるにあたり、特定の人々や見解への偏見からではなく、ただ真理を求める思いに突き動かされていることを理解してほしい。さらに、社会の将来の改良に関する多様な試論を、空想と決めつける先入観にとらわれず冷静に読んできたことを明言し、証拠もないのに望むことを信じたり、証拠があるが不快な事柄への同意を退けたりするほど、自分の理解を都合よく操れるわけではないことも付け加えておく。

私が描く人間の生のありさまは暗く物悲しいが、その陰は現実の陰影を写し取ったにすぎず、偏見や生来の気質、偏屈な見方がもたらす歪みではないと確信している。本書末尾の二章で述べた心の理論、すなわち精神作用の見取り図は、人生に横たわる多くの

不幸や諸惡の存在について、私としては筋道立てて十分に説明し得ると考えるが、その説明力が他者にも同様に及び、同じ納得をもたらすかどうかは、読者の判断に委ねたい。

著者は、社会の改善や進歩を阻む根本問題こそ最大の障害だとみなし、識見と実行力のある人々の関心をそこに向けてほしいと願っている。そして、その問題が少なくとも理論上解決可能だと明らかにになれば、現在の見解は進んで撤回し、誤りの指摘をむしろ喜んで受け入れるつもりだ。

一七九八年六月七日